日本の天文学についての印象

W. スタンチョ*

日本訪問は今回で3回目です．最初の滞在は 1977 年の5月から 11 月まででした．当時，京都大学の宇宙物理学教室はまだ大変古い建物にありました．大学の北キャンパスの中では一番古い建物だったと教えられています．日本にあるものは何でも近代的である筈だ，と思っていたので，初めてそこを訪れた時はちょっとびっくりしました．建物に入って中を案内して貰うと，研究設備は設置されている建物とは対称的に全くモダンな物でした．一目見て大層快適とは見えない古い建物もここの人達が良い重要な研究をするのに障害ではなかったのです．

1978 年 12 月に2度目に日本を訪れた時も事情は同じようなものでした．一年以上経っていたのに私の戸棚の中にはレポート用紙や計算機のアウトプット等がその儘残っていました．

今度の3回目の訪問では何もかも変っていました．建物は新しくモダンになっています．見まわすと全てのものが素敵で快適に見えるので驚いてしまいます．皆さんも満足していらっしゃることでしょう．

日本における天文学はオランダやイギリスなど私が見たヨーロッパの国の天文学とほぼ同じレベルにある，という印象を持っています．研究設備はここでは大変近代的です．大変印象的なのは，ほとんどの設備が日本製だということです．ヨーロッパと違うのは，日本では週 6 日働くのに向うでは週5日だということです．また，こちらの人は大層夜遅くまで仕事をするようですね．

ヨーロッパでは異った国の天文学者間の情報交換は極めて容易です．毎年ヨーロッパでは多くの国際的な会合が開かれます．天文学があまり進んでいない開発途上国に囲まれているという点で日本は少し気の毒な状況にあります．日本学術振興会 (JSPS) とインドネシア高等教育局 (DGHE) 間の覚え書によって現在実施されているような国際協力を日本とアジアの国の間で行うのはこれらの国の天文学を振興させる良い方法だと思います．

休憩時間中にこのオーバードクター問題について話す機会がありました．京都大学宇宙物理学教室には約 15 名のオーバードクターがいるそうです．その多くの人は予備校で非常勤講師として働いています．彼等が大学から給料を貰っていないと聞いてびっくりしました．反対に大学で研究を続けるためには授業料を払わなければならないのです．伊藤博士（オーバードクター），加藤教授と私との会話を以下に記して見ます．

スタンチョ：「あなたは大学で働いているのに給料を貰っていないし，逆に払わなければならないのですね．大学で働くことによってどういう利益を期待しているのですか？」

伊藤：「研究する機会です.」

スタンチョ：「ということはただ趣味としてここで研究するということですか？」

加藤：「趣味としてではありません．彼等は天文学者ですし，天文学者として研究するのです.」

スタンチョ：「沢山論文を書けば大学で職を得られると思いますか？」

伊藤：「その可能性は低いと思います.」

スタンチョ：「もし論文をかけば，宇宙物理学教室の論文として数えられるのでしょう？」

伊藤：「そうです.」

スタンチョ：「ということはあなたは大学に何分かの寄与をしているわけですね．それなのにあなたが大学に払わなければならない．これは何だか変ですね.」

伊藤 (微笑みながら)：「私もそう思います.」

加藤：「そうですね．日本でこれは問題です．多くの若い人が一生懸命研究しているのに職がありません．ヨーロッパ諸国にはリサーチフェローの職が沢山ありますが日本にはあまりありません.」

私は科学研究が日本文化の強い伝統になっていることに深く感銘を受けました．多くの人が研究のための研究を行っているからです．それは大変良い事に違いありません．個人的な意見を云わせて貰えば，日本政府がここの若い人達にもっとリサーチフェローの職を提供できればもっと良いのに，ということです．

1980 年 12 月 22 日記す．

（成相恭二訳）

* ボッシャ天文台 W. Sutantyo (京大理，日本学術振興会外国人招へい研究者)： My Impression on the Astronomy in Japan